
榎屈といっしょ！あーるっ！

椎堂 真砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

榎風といっしょ！あーるっ！

【Nコード】

N1970E

【作者名】

椎堂 真砂

【あらすじ】

剣野景色と僕があつてから三年と半年。ようやく元の生活へ戻り、僕は榎風達と騒がしくも楽しく暮らしていた。そこへやって来た『恩人・弓削水豹』と涼暮市で起きた至上最悪の凶悪犯罪『連続殺戮事件』。僕は、そして榎風の日常は……《西宮東×椎堂真砂による『榎風といっしょ！』続編！》毎週土曜日定期更新。*7/21から8/3まで作者の予定がたてこんでいるため、一時的更新を凍結、代わりに書き貯めてある別作品を7/20から投稿しますの
で、よろしかったらそちらをどうぞ。

序（前書き）

この小説は西宮東著・『榎風といっしょ！』の続編です。

一応、前作を読まなくても話が進むようににはしていますが、過度の前作ネタバレはしない予定なので、バックヤードが知りたいと言う方は前作をどうぞ。

序

さくり。

人を裂く感覚はあまり手にまとわりつかなかった。

昔自分の手首を切り裂いた感覚とはまた違う、他人の皮膚を切り、肉を裂き、骨を断つ手応え。

直に伝わる感触。

直に伝わる感覚。

直に伝わる感情。

何もかも、真新しい。

脳髓が蕩けそうなほど鮮烈で、脳髓が焼ききれそうなほど悪寒がする。

僕は間違いなく人を殺した。

僕は間違いなく命を奪った。

殺害しつくした。

略奪しつくした。

そう、僕は言い訳の余地もなく、自分以外の他人というやつを殺した。

それがこれから先、僕の人生にどんな影響を与えるかは、この熱気と悪寒にまみれた頭じゃ考えもつかない。

でも今、僕が他人を殺したという事実はかわらない。

罪悪感で首を締めるには十分な事実。

いや、行為と言うべきなのかもしれない。

僕が他人を殺したという行為は未だに誰も知られていない。当たり前だ。

僕がそう組んだんだから。

僕がそう計画したんだから。

誰にも邪魔されないように殺すため。

誰にも知られず首を刈り取るため。

他人に観測されていないなら、これはまだ事実じゃない。行為だ。行為を嘘で隠して、事実を変えてしまえば良い。

そうすれば、これは僕だけが知っている行為だ。主観的なもので、決して客観的な事実じゃない。

そもそも、僕がなぜ人を殺したのかと言えば、やむにやまれない事情がある。

でも。

でもだからといって、人を殺したことを仕方ないなんて言えない。

人を殺す以外にも、解決方法はあった。

むしろ、人を殺す解決方法の方が多い。

だから仕方ないなんて言えない。

仕方ないなんて言いようがない。

僕は間違えたのだ。

完膚無きまでに間違えたのだ。

間違えようもなく間違えたのだ。

だからこれは贖罪。

これは人を殺した事への購い。

殺された人のために書いた、僕の日記。

殺人鬼の書いた『殺人日記』。

序（後書き）

西宮東著『おまけ・続編開始までの経緯（電話編1）』

ジリリリリ……

ガチャ

西宮『あ、椎堂さんのお宅ですか？』

椎堂『間違い電話です』

西宮『椎堂さんのお宅ですよ？』

椎堂『御用のある方はその思いを胸に秘めたまま、墓場まで行ってください』

西宮『椎堂さんはオタクですよ？』

椎堂『違います』

西宮『毎回毎回電話がかつてくる度に否定するのやめてくれね？』

椎堂『それは私に何も語るなと？』

西宮『普通に話そうぜ……』

椎堂『というわけでこんばんは、西宮君』

西宮『ようやく挨拶をくれてありがとう、椎堂』

椎堂『それで、一月一日の忙しい夜に何ですか？』

西宮『俺には正月と言う概念は無いから関係ないね』

椎堂『去年、正月だから除夜の鐘をつきに行こうと言った人とは思えないセリフですね』西宮『いや、それ俺じゃないから。確かに同じ人じゃないから』

椎堂『むう……』

西宮『で、用事なんだけど……』

椎堂『西宮君は決定的に私の期限を損ねたから、大抵の要求は通らないと思うといいですよ』

西宮『……器量ちいせえ……』

椎堂『……………』

ガチャ

ツーツーツー

一章：殺人日記 01

この世の中には六つの魔法が存在する。

一つ目の魔法《才能^{ギフト}》。

二つ目の魔法《虚偽^{ゴースト}》

三つ目の魔法《空間^{ドリーム}》

四つ目の魔法《欠落^{スペース}》

五つ目の魔法《存在^{リスタート}》

そして、六つ目の魔法《人間^{セカイ}》。

誰にも知られていない、魔術で組上げられた、誰にも使えない魔術の魔法。

魔法使いにして世界最高の魔術師、秋宮榎^{アキミヤカナギ}が編み上げた、絶対無二の魔術。

僕^{アキミヤセカイ} 秋宮世界を作り上げた、無機物から人間を作り出す大魔術。他人の再現不可能な、大魔術。

榎^{アキミヤセカイ}が僕を作り始めた理由は、僕にとってとてもなく悲しくて、とてもなく痛々しかったけど、今では納得している。そのつもり。

「セイ」

「はい？」

何より、今の榎^{アキミヤセカイ}はしっかりと僕を見てくれている。

何より、今の僕はしっかりと榎^{アキミヤセカイ}を好きでいる。

「セイー」

「何ですか？」

僕は榎^{アキミヤセカイ}と一時期離れていたが、それでも僕らはちゃんと繋がっ

ていた。

切れることなくしつかりと。

三年という月日ですり減らないほどに。

約三年半前、切れそうになったけれど、それでもちゃんと繋がったままだった。

「セーイー」

「だから、何ですか？」

三年もの間、僕らは離れていた。

その三年間にあった出来事を、再開して半年経った今でも僕は話せずにいる。

榎風も僕に聞いてこない。

それは僕を信頼してくれているのかもしれないし、単純に気にかけてくれていないだけかもしれない。

僕としては、前者であってほしい。

そう信じたいから、僕も榎風の三年を聞かない。

榎風の事を信じているから、榎風の三年間を聞かない。

気になるけど、気にしないことにした。

「セーイー」

「な、なんですか！？いきなり抱きつかないで下さい！」

広い玄関ロビーを掃除していると、背後から唐突に抱き締められた。

こんな風に何の不安もなく抱きつかれると、逆に後者なんじゃないかと思えてくるけど。

それと一緒に、僕もどうでもよくなった。

気にしないことを、気にしなくなれる。

「だからって頬擦りしないで下さい」

「だからって何だよぉー！んう？恥ずかしーのかぁ？相変わらず可愛いーなぁー！食べちゃいたい！いや、むしろ食べられたい！私をた、べ、て？」

そう言つて、後ろから抱き締めている手をより強くする。

榎風は僕が半年前帰つて以来、毎日こんな感じた。

ひたすらに僕を触り、僕を抱きすくめる。

まるで三年間なんて無いように。

まるで四年前そのもののように。

変わったことと言えば、

「ほんと、頬赤くしちゃって可愛いなあ！スリスリスリスリスリスリスリ……」

「いい加減、頬擦りを止めてください！それとオノマトペを自ら口にするのはどうかと思うんですよ、僕は」

「ツンデレえーい！ツンデレやつほおーい！」

「意味分かりませんし……」

僕自身が照れるようになったことと、

「カーナーギーー！」

「きやはははははっ！」

葵と茜が僕らの間に割つて入ろうとすることぐらいだ。

僕としては嬉しい限り。

精神的に大助かりの助っ人だ。

榎風の場合、最近二人の制止がないと、榎風は際限無く僕と身体的接触を図ろうとする。

その、先も。

「昼間っから何しくさっちゃってるんですかっ！？義兄さんと！」
「そぉーだ、そぉーだ！」

そういつて、ホームラン予告のように榎風にバットを付きつける。
最初の頃はあの大太刀で二人を止めようとしていたが、榎風が夜中にこっそりと回収して以来、いつぞやのバットで襲いかかってくる。

生身の榎風からしてみれば、僕らの一撃は何にしたって当たれば必殺のようなものなだけれど。

葵にしたって茜にしたって僕にしたって、ナリは小さいが魔術で作られた、戦える体なんだから。

僕は無機物から作られた有機物として。

葵と茜は人間から組み替えられた有機物として。

それぞれ、元々は無い命。

昔からタブーとされてきた、神の作っていない命。

四年前に作られたときと同じまま。

何も変わっちゃいない。

葵は淡い青の浴衣に青い髪と青い瞳。

濃い赤色の髪と瞳を持つ茜は黒い布地に白いフリルだらけの服をまとっている。

身長も何も変わっていない。

肉体的に成長したのは、いや、成長し続けているのは僕だけだ。

それが作られ方による違いなのかどうかは、僕以外に比較対象がないから分らない。

分かる必要もない。

「いい加減、はぁーなぁーれえーろぉー！」

「いやぁー！助けて、セイイ〜！」

ちつとも助けが必要じゃなさに叫んで、僕の後ろに身を縮こまらせより強く抱きつく。

まるでただ抱きつくための口実のように。

実際、ただの口実なんだろうけど。

だからといって、このままスピードの乗った一撃を頭に食らうのは全く持つてごめんなので、反射的に白刃取り。

白刃なんて何処にもついていないけど。

結果に大差無い。

どっちにしたって葵相手なら瀕死の重症だ。

でもとりあえず何とか葵を止めることは成功。

「に、義兄さん!？」

「……葵はもうちょっと周りを考えて行動しような」

「ごめんなひゃい」

このタイミングで噛むとは思わなかった。

その所為か、顔を赤らめて恥ずかしがる葵に、ふっと頬が緩んだ。

「私を差しおいて萌えてもらおうなど444億年早いわ!」

「わひゃ!？」

葵の行動になごんでいる間に、いつの間にか榎風は葵の後ろに回り込んでいた。

回り込んで取り押さえるくらいならまだ可愛いげがあると言つものだが、榎風がその程度で留まるはずもない。

止めようと思ったが時既に遅し。榎風は既に行動にうつっていた。

「よつと!」

「わひゃ っ!」

つんざくような悲鳴。

耳鳴りがする。

悲鳴のあまりのインパクトに思わず怯んでしまった所為で何が起こったのかいまいち分からなかった。

が、榎風の普段の行動や葵が胸の辺りを必死に押さえている状況から察するに、榎風が後ろから葵の浴衣の帯をほどいた模様。

「うおっりっあ！」

「いや、ちょ、まつ、かーっ！」

それから間髪入れずに頭をガッチリホールドし、そのまま適当な部屋めがけてリリース。榎風の手から離れた葵はよく分からない悲鳴を上げながら飛んでいった。

葵の飛んでいった部屋から物がたくさん割れるような音がしたが、その後のことは考えると鬱になるので思考停止。

「トドメエ！」

「留めさして何する気ですかっ」

僕の制止も聞かず、榎風は葵を投げ入れた部屋に向かい走り込む。僕も榎風をつかんで止めようとしたが間に合っはらずもなく、榎風は扉の前に到着。

本当に命に止めをさすような真似はしないだろうが、無用に怪我人は出したくない。

それに家が荒らされれば、掃除というツケが必ず僕に回ってくる。止めないわけにはいかなかった。

「おうりあああっ！」

「ストオオオッブ！」

無視。

完膚無きまでに無視。

そのまま部屋に突入し魔力の籠った一撃をみまう　かと思いきや、普通に扉の前で立ち止まり、ドアを閉めた。

「あ、あれ？」

慌てて僕も立ち止まる。

何をするかと思えば、おもむろに懷から一枚の紙片を取り出すと、ドアの真ん中辺りに張り付けた。

それだけし終わると、一仕事終えたみたいな爽やかな顔をしてドアから間反対に離れていった。

「さ、セイ、デート行くぞ、デートかつこハート」

「かつこハートとか言うのは止めてください」

「んじゃ、かつこラヴ？」

「いりません」

「かつこモナムー？」

「かつこの中にいちいち文章を入れないでくださいよ」

「えー、私の愛だぞ？」

全然悪びれた様子もなく、楽しそうに笑っている榎風。

そんな榎風に何も言うことができず、僕は項垂れながらため息をついた。

このままだとどんどん不毛というか非生産的というかな話題がグダグダと続きかねなかったので、話題を変える。

「榎風、さっきのは？」

「私の愛についてか？いくらでも語ってやるぞ？ん？なんなら夜にベッドの上で」

「っ!？」

僕は自分でも顔が赤くなるのが分かったが、構わず榎風の言葉に自分の言葉を重ねる。

「じゃなくてっ!さっきのドアに貼った奴ですっ!」

「ドアに愛情は貼ってないが？」

「愛から離れてくださいっ!紙ですよ、紙!ペーパー!」

「ははっ、分かってる分かってる。ムキになって本当にかわいいなあ」

榎風は僕に手を伸ばして、頭を撫でようとする。

そのまま撫でられると通例のごとく話がグダグダとなるので僕は一歩下がって避けた。

すると榎風は何事もなかったかのように二歩近づき、左手で首をからめとるようにして僕を胸に埋めた。

普通に恥ずかしい。

そんなことは我関せず、むしろ喜ぶように嫌らしい笑みを浮かべながら、榎風は僕の質問に答えた。

「あれはな、鍵だ」

「鍵、ですか？」

「ああ、どんな扉にでも使える万能魔術鍵だ。私謹製のな。いや、汎用性を魔術式に組み込むのは苦労したよ」

榎風の謹製となると、世界中の研究者が渦高く金をつんでも欲しがるような代物だ。

僕にそういう価値は分らないけど、少なくとも一千万円は下らないだろう。

いくらどんなドアに使えても、お金がそれでは実用性は皆無だが、

研究対象としてこれ程有益なものはない。

いわば、ブラックボックスなのだ。

榎風が滅多に魔術式を売らないというのも、値段に拍車をかけているのだろうか。

「因みに、頑丈性も抜群だ。外から剥がさない限り、何があっても絶対に開かない」

ドアの鍵、一千万円。

僕の貞操、プライスレス。

お金で変えない価値があるっ！

「これで思う存分イチャイチャラヴラヴ出来」

「アナタは私を封印でもする気ですかっ!？」

「あだあっ!」

案の定なことを言っている榎風の頭が、ものすごい早さで前に傾いた。

頭を思いきり殴られた様子。

「何をする！痛いじゃないか！というかお前、どうやって部屋から出てきた！私とセイがラヴラヴしてる途中にこっそり剥がして、見せつける計画が台無しじゃないかっ!」

「殺すっ！今すぐ殺しますっ!」

榎風のことを背後から殴ったのは、努髪天をついた葵だった。あの状態の葵に殴られて無事なんて、とんでもない頑丈さだ。何にしろ、身体的に安全を確保できたので、葵に心から感謝しながら榎風の腕から抜け出す。

お金で変えない価値を失いたくないので、榎風から二歩離れる。

その時、折り紙をしている茜が見えた。
時価一千万円以上の紙で。

.....。

茜の織り上げた紙飛行機が僕の頭にコツンと当たってヒラヒラ落ちる。

茜は楽しそうに笑い声を上げた。

その声に合わせるように、榎風と葵の騒ぎ声が近くで大きくなる。騒がしいことこの上無い。

これが楽しい楽しい僕の今の日常だ。

一章：殺人日記 01（後書き）

西宮東著『おまけ・続編開始までの経緯（電話編2）』

西宮『いきなり切るなよう……』

椎堂『……まあ、いいですけど。で、用事って何ですか？』

西宮『いや、ぶっちゃけるとだな』

椎堂『ぶっちゃけなくていいですから、あらまだけを話しやがりませこんちくしょう』

西宮『俺の小説の続編書いて欲しいわけなのさ』

椎堂『ええ……』

西宮『やる気ないなっ！』

椎堂『だって、続編書くとなると小説よみ直したり、設定確認したり面倒じゃないですかぁー』

西宮『受験勉強もしてない癖して何言いやがる。俺よか時間全然余りまくってんじゃねえーかよ』

椎堂『見えてないところで忙しいんですよ。第一、私にメリットがないじゃないですか』

西宮『そうだけどさぁ……』

椎堂『自分の小説書くだけでも手一杯なんですから、他を当たってください』

西宮『そうか、残念だな……』

椎堂『何がですか？』

西宮『折角姉さんが直々の指名でお前の書いたやつが読みたいって言ったのに……』

椎堂『姉さんって……西宮君の？』

西宮『ああ、そうだけど？』

椎堂『OK。西宮君、設定資料とか関係物全部寄越してください』

西宮『………』

椎堂『受け渡し日時はそうですね……、明日の昼にでも』

西宮『現金だなあ……』

椎堂『一途と言って下さい』

西宮『さいですか……』

一章：殺人日記 02

十月三日水曜日。

涼暮市の外れにある榎風と僕、そして葵と茜を含めた四人の住む白亜の大豪邸に来客があった。

日課となっている玄関をしていた僕が、チャイムはなっていないかったがすぐに気付く。

勘とかそういうものではなく、足音で。

別に僕が特別感覚が鋭敏なわけではなく、この家に上ってくるためにつかう長い長い階段が足音を響かせる作りなのだ。

それだけでなく、足音の主はどうやら下駄のようなものを履いているらしく、かなり響きやすかった。

チャイムの音になる前に、僕は掃除用具を片付けて玄関に向かう。一応、招かれざる客の場合も想定して警戒もする。

世界最高の魔術師と言われている榎風だ。島国の田舎とはいえ堂々と山の頂に豪邸を構えていれば当然と言えば当然すぎる可能性だ。歩いて玄関までいつているうちにチャイムがなった。

「はい、今出ます」

僕は警戒しながらも思わず軽快に挨拶。

……僕は警戒もできないアホの子なのだろうか。

ドアの向こうからは当然のように返事はない。でも、気配、というか存在感は確かにある。

改めて集中しなおし内開きのドアを開ける限界の距離を保ちながら僕はドアを開けた。

「やあ、少年。^{マインディア}久しぶりだな」

僕は扉を閉めた。

そして頭の中を整理しようと必死になる。

ドアの向こう側に立っていたのは一人の女性だ。

身長は僕より十センチ程高いくらいで160センチあるかないか。
髪も瞳も黒く顔立ちも日本人らしい。

髪が短く中性的な顔立ちの所為で顔だけみると男女判別しにくい
が、体の構造が明らかに女性だ。

ただ、着ているものは男物の着流しで履いているのは鼻緒の黒い
下駄。

男性と女性がその人の中には混在している。

ひどく倒錯的な感じ。

それでも僕はその人を女性と断言できる。

理由なんて簡単なことだ。

その女性は僕にとって初対面ではなく、自己紹介のときにそう聞
いたから。

自己紹介を受けたのは三年も昔の話だけれど。

僕は心を沈めて、再度扉を開く。

「やあ、少年。^{マイディア}久しぶりだな」

RPGのキャラクターよろしく同じセリフを同じように言う女性。
先ほどと違うのは嫌らしい笑みを浮かべていることくらいだ。

その表情を変えようともし隠そうともせず、腰の上に背筋の乗って
いない奇妙な姿勢のまま僕の反応を待っている。

十秒ほど経ってからようやく我に帰った僕は、カラカラに乾いた
喉で言葉を紡ぎ出した。

「あさ……らし……さん？」

「ああ、君の慈しむべき恩人がわざわざ遠路はるばるやって来たぞ、
^{マイディア}少年」

カランコロンカラン。

下駄を鳴らして散歩近づく。

僕の正面三十センチ前。視界一杯に彼女の顔が広がる。

その距離で彼女は手を上げて、僕の頭の上にポンと軽く置く。

「半年とはいえ、本当に久しぶりだ。身長も少し高くなって……うん、男らしくなって結構結構」

そんなことを言いながら、僕の頭を撫でて手櫛で髪をすく。

男らしくなったと口で言いながらも、全くの子供扱いだ。

でも、榎風と違い恥ずかしくなるような扱いではなく、和むような感覚。

子を慈しむ親のように、その触り方は優しく、心を安心させる。

「死ねえやあああつ！」

「っ!?!」

和やかなムードの中に突如怒号。

相手は見なくとも分かる。

僕は勘に任せた咄嗟の判断で目の前の女性の手を引っ張りながら屈んだ。

直後、頭上に赤い線が通過する。

僕が黙視した限り、それは槍だった。もちろん刃付きで殺傷力抜群のもの。

避けなければ僕共々串刺しになるところだった。

一番危険なのは、外部の敵より槍を平気で投げってくる榎風なのかもしれないと、心のどこかで僕は認識した。

「で、我が家に何か用かな？」

榎風が慇懃無礼な口調で対面する水豹さんに問う。
それを気にしたような風もなく、中性的な顔に嫌らしい笑みを浮かべて榎風に応じている。

「ああ、その通りだよ。さすが、希代の魔術師は話が早くていいな」
「用事があるなら、とっとと帰れ」

榎風はあくまで水豹さんに攻撃的な態度で応じる。
さすがにそれはあんまりなので、僕は口を挟んだ。
水豹さんは僕の恩人にあたる人物だ。
応じているのが榎風とはいえ、僕としては心苦しい。

「榎風」

「ん、なんだ？私を愛し私に愛されているセイ」

水豹さんに自慢するかのように、わざわざ一語一語にアクセントをつけて喋る榎風。

敵愾心と嫉妬心が剥き出しだった。
隠そうともしていない。

「とりあえず、この体勢どうにかしてもらえませんか？」
「無・理」

一言でばっさり切られた。

因みにこの体勢と言うのは、隣に座った状態で榎風の胸に抱き抱えられると言うとんでもなく恥ずかしい体勢だ。

「少なくとも、セイと」

榎風は水豹さんを顎で指し、

「この関係が分かるまではな」

まるで物でも見るかのように見下す。

水豹さんはそんな榎風を見て、破顔大笑した。

「はっはっは、本当に貴様は変わらんなあ！」

一瞬なんのことやらさっぱりだった。

が、疑問を口にするような余地を持たせずに、水豹さんは二の句を次いだ。

「変わらない貴様を見ると、本当に殺したくなるよ」

「黙れ、とっとと帰れ。私はセイとイチヤイチヤするのに忙しいんだ」

水豹さんは超然とした嫌らしい笑顔。

榎風は敵意剥き出しの敵めしい顔。

本当に空気が悪い。

部屋の端にいる茜と葵が入るのを躊躇うくらいに。

いつまでもこんな重い空気を続けている訳にはいけないので、さつき感じた疑問を口にすることにした。

「あの……」

「うん？」

マイディアー

「どうした、少年？」

一瞬にして視線が僕に集中する。

切り出しにくいことこの上なかったが、ここで切り出さない訳にはいけないので思い切って口に出した。

「二人って知り合いなん、ですか……？」

思わず尻すぼみに。

そんな僕の態度に嫌らしい笑みを崩さずに水豹さんが答えた。

「ああ、私と榎風はどうぞ」

「クラスメートだったんだよ、学校時代のな」

と思いきや、榎風が無理矢理遮って答えた。

「思えばあの頃は灰色だったなあ……。それを考えると今がいかに幸せか分かるよ」

「やめろ、榎風っ！さすがに頬擦りは恥ずかしすぎるっ！」

「えー……」

口ではそう言いながらも、あっさり僕を解放した。

「たまには恥ずかしがるセイを……っていうのも良いなあ」

訂正。

今後、何かを仕掛けてくる模様。
用心しておこう。

転ばぬ先の杖、というやつ。

その杖で藪をついて蛇を出したことは多々あるが。

「
てるんだ」

そんな、言っつまえばグダグダな空気の中に、水豹さんの低い声が届いた。

「貴様のその『灰色の学校生活』の所為で、どれだけの人数が迷惑したと思っっているんだ？」

水豹さんは嫌らしい笑みを消して、真剣な表情を露にする。
僕は一度しか見たことのない、真剣な表情。

「1365人」

声を区切って、水豹さんは明言した。

「貴様の馬鹿な行いの所為で、1365人の人間が甚大な被害を被った。周辺のこと考えれば、おおよそ10倍に被害を受けた人数は膨らむだろう」

そんなの、天災のレベルだ。

「幸い、死人はでなかったがな」

「当たり前だ、そうなるように調整したんだからな」

榎風は自信ありげに、水豹さんに切り返した。

そんな榎風が何をしたか気になり、思わず横から口を挟んだ。

「榎風、一体何やったんですか……？」

「なあーに」

軽々しい口調に恐怖を抱きながらも、榎風の言葉をしっかり受け止めた。

「私の通っていたドイツの魔術専門マジック学校を一つ、この世から消した
だけさ」

「私の昔話はどうでもいいんだ。ついでに水豹の言うところの『迷惑をかけた人々』も、な。まあ、セイが私の昔話が聴きたいというならいくらでも話してやるが」

榎風のその言葉に水豹さんは少しムツとしながらも、すぐに平静の顔にもどし、榎風の言葉に耳を傾けた。

僕は榎風の過去に興味がないわけではなかったが、今は榎風の話に傾聴する。

「で、セイと水豹、お前らはどういう関係なんだ？そもそも水豹、お前は長期行方不明で国籍も何も無くなってたはずじゃないのか？」
「はっはっは、情報が古いな」

気作さんは腕を組んで胸を反らし、豪放磊落に笑う。まるで何処かの勧善懲悪が大好きなご隠居のように。

「三年……いや、もう四年前と言ったほうが近いかな。私は大学教授に就任したのさ。もちろん国籍もちゃんとあるぞ？」

「お前が何処で何してようが知ったことじゃねえっての。ここでセイと一緒に余生をいちゃいちゃラヴラヴしながら過ごすんだからな」

「因みに、私がいる大学は」

「誰も聞いてねえっての」

適当にあしらおうとしている榎風を余所に、水豹さんは嫌らしい笑みを浮かべながら榎風に言った。

「アンリフェルト大学」

「……………」

大学の名前を聞いた途端、榎風の眉が微かに反応した。

そんな榎風の反応を見て、水豹さんは面白そうに付け加える。

「分かっているとは思うが、お前が消滅させた専門学校の跡地に立てられた私立の大学だ」

「……………趣味悪い」

「何とでも言うが良しさ。これは貴様への意趣返しなんだからな。私からお前の云うところの『灰色の学校生活』でさえも奪った秋宮榎風へのな」

相変わらずの嫌らしさ。

それを称えるような笑み。

榎風はそれを無視するように閑話休題をした。

「で、結局お前はセイとどういう関係なんだ？」

「婚約者だ」

「ぶえっふっ！」

盛大に吹いたのは榎風でも無ければ、勿論水豹さん本人なはずもなく、僕自身だ。

因みに、僕が吹いたのは水豹さんの妄言に対してではなく、それを信じたらしい榎風が僕を力一杯抱き締めて、確保に走ったからだ。魔術を使いかねないほど本気。

まさしく一触即発。

このままではこの家どころか町ごと吹っ飛びかねない事態に冗談抜きでなってしまうので、僕が本当のことを明かすことにした。

「恩人、なんですよ」

「何のだ？」

「僕が榎風から離れていた三年間の、です」

榎風さんは苦虫を噛んだような顔をした。

ちようどよい機会なので、僕は榎風に全てではないけれど、全てを話すことはできないけれど、ほんの少しだけでも話すことにした。

「僕が動けなかった三年間、僕の世話をしてくれた人なんです」

「……………ちっ」

榎風は僕の言葉を聞いて、結構長い間黙っていた。

榎風と水豹さんは詳しいことは分からないが、学生時代に少なからず因縁があるみたいだし、一緒にいるだけでもあまり良い気分ではないんだろう。

そんな相手が僕の恩人だったとなれば、やはり葛藤が榎風の中には存在するんだろう。

自分に置き換えて考えるのは僕には難しいけれど、榎風がそれに近いことを考えているのは察せる。

だから僕は榎風の次の反応をまつ。

結局、僕は榎風にいつだって従うのだ。

「……………ちっ」

榎風はこれ見よがしに舌打ちすると、僕の拘束を解いた。

そしてソファに深く腰かけると天を仰いで言った。

「葵、客だ。茶を出してやれ」

葵の上ずった返事が、遠くの方から聞こえてきた。

一章：殺人日記 05

葵と茜が二人で準備してくれたお茶と茶菓子を、榎風と水豹さんとの間に漂う険悪な雰囲気の中で僕が食していると、おもむろに榎風が口を開いた。

「お前がもし本当にセイの恩人なら……」

不機嫌そうな榎風の声。

気のせいかな、僕はその中に苦々しさのような声色を感じとった。そして繋がる言葉を聞いて、確信が持てた。

「お前がここにもって来た用事があるのなら聞いてやらないこともない可能性がなきにしもあらずのような気がする気分だ」

素直になれない子供が言葉を覚えて必死に本意を隠しながらもバレレない言い回しをしてしまったかのような榎風の台詞。
「というかそのまんまだ。」

そのことに自分自身でも気付いているのか、榎風はバツが悪そうにそっぽを向いた。

水豹さんはそんな榎風に忍び笑いで返しながら、それを決して声色に出さぬように喋り始めた。

「じゃあ、その言葉に甘えて話をさせてもらおう」

水豹さんは一度笑うように、ふっと息を吐く。

「私がここに来たのは他でもない、彼に会うのも一つの要素ではある」

水豹さんは僕を一瞥した。

そんな水豹さんを榎風は思い切り睨んだが、水豹さんは嫌らしい笑顔で受け流し、言葉が続けた。

「が、何分忙しいこの身だ。それだけを理由に日本は訪れられない。ここに来た今日の用事、それは――」

水豹さんはもったいつけるように一つ間を置いてゆっくり瞬きをしてから、自分の言葉を疑うように確かめながら言葉を発した。

「秋宮榎風、貴様に殺人の嫌疑、及び警察への協力要請が出ている。私は警察庁への出頭、及び協力要請の通達へ来た」

殺人容疑。

協力要請。

僕の中で渦巻く、水豹さんの口から生まれた二つの言葉。

確かに榎風は疑いようもなく、誤認しようもなく『殺人経験者』ではある。が、それは別に怨恨や金銭、衝動などの人間の本質的な欲求にかられてしたわけではなく、殺しにきた相手を殺し返した、というものだ。

しかも殺人を行ったのは法律の整っていない、文字通りの無法地帯だ。そんな場所であれば相手は手を出しようがないし、法律外での調整もちゃんとしている。

殺人という『罪』はある。

法律という『罰』はない。

『罰』を与えようがない『罪』なのだ。

殺伐とした話ではあるが、事実ではある。

「受けんな、そんなどうでも良い話。私にあるのは聞いてやる義務程度だ」

榎風はその言葉の下に水豹さんの要求の一切を斥けた。

榎風の国家とか行政がからんできのデフォルト反応だ。

別に権力に対する恐怖とかではなく、本当にただ『何となく』でその反応。

真実かどうかは知る由もないことだが。

「例え、それを貴様が仕事としてもってきたとしても、な」

「……………」

「私は仕事を受ける必要もなく、金は有り余ってるからな。普通にセイと暮らすにはもう仕事をする必要はない」

沈黙する水豹さんに対し、言い訳じみたそんな言葉を次いだ榎風。確かに普通に生活するなら仕事をする必要はないだろうが、誠に残念な事に榎風が普通に生活できるはずもない。

恐らく20年後には財産が尽きる。

もともとあつた財産はこの邸宅に大部分を費やしてしまったし、それでも豪勢にくらして20年もつものだから、榎風の財産が化物じみていることを再確認した。

でも確かに、20年はもつのだ。

今すぐ仕事しなければならぬことはない。

水豹さんの頼みであれば聞きたいのは山々なのだが、榎風が聞くつもりがないなら僕がこれ以上何か言うつもりはない。

『恩人』の水豹さんには悪いが、僕のプライオリティは榎風の方が上なのだ。

僕のやっていることは、果たして榎風を優先しているかどうかと聞かれれば、疑問を懐かざるをえないのだが。

「さあ、貴様の用事は済んだらう？何ならもう一度答えてやる。
殺人嫌疑については、嫌疑じゃなくて確証にして、証拠付きで出直
してこい。協力要請は却下。以上」

「……………」

「まあ、セイを救ってくれたことは感謝してるさ。立ち寄るくらい
は許可してやろう」

早くも追い出しモードに入っている榎風。

流石にゆつくり話す時間くらいは与えてほしいと思いつく口を挟も
うとした瞬間、水豹さんが言葉ばそりと呟いた。

僕らを硬直させるに十分な言葉だった。

「『理由なき剣』」

ぽつりと。

はつきりと。

「この話には『理由なき剣』が関わっている可能性がかなり高い」

そう水豹さんは呟いた。

一章：殺人日記 06

21。

陰惨なんて言葉じゃ生温い。

19。

残酷なんて言葉じゃ程遠い。

38。

煉獄なんて言葉じゃ嘘臭い。

合わせて78。

此処はまるで世界から欠け落ちた、なんていうチープな表現で型にはまってしまう光景。

21。19。38。

合わせて78。

僕はこの瞬間、その数字が大嫌いになった。
聞くだけで怖気が走る。

耳に届くだけでこの光景を思い出す。

「お、ええ……っ！」

僕の後ろで誰かが吐いた。

連鎖的にせり上がってくる吐き気。

こんな光景、慣れる方が狂っている。

それでも僕は吐くことはない。吐いてはいけない。

僕の吐き気の分は後ろにいる誰かが吐いてくれる。

落ち着け、僕。

冷静になれ、僕。

僕は榎風の恋人だ。

こんな所で失態を曝すわけにはいかない。

……………。

……。

「酷い、光景ですね」

「ああ、そうだな」

やっとの思いで絞りだした言葉に、横に並んだ榎風が平然と答えた。

内心、平然としていないのかもしれないが、少なくとも完全なる平然さを取り繕って僕に応じている。

僕なんかとは比べ物にならない胆力。

もしくは、狂気。

あの飄々としている水豹さんでさえも、僕らの後ろで言葉を失っている。

それほど迄に凄まじい景色。

赤に染まった大地。

紅一色の木々。

他の色の余地が無いほど、朱に埋めつくされた空間。

深緑の森に現れた、血色の一点。

21。

19。

38。

合わせて78。

21人。

19人。

38人。

合わせて78人。

まさしく地獄絵図。

まさしく死山血河。

まさしく『連続殺戮事件』。

一回目の殺戮では21人。
二回目の殺戮では19人。
三回目の殺戮では38人。
合わせて78人が三回の殺戮、たった三日間で殺された。
人のしたことは到底思えない。
人に来ることとは到底思えない。

「で、私に何をしろって？」

澀んだ空気と重たい沈黙の中、榎風は振り返って水豹さんに不機嫌そう尋ねた。

「まさか、犯人見つけてこい、なんて探偵の真似事させようってんじゃないだろ？」

「あ、ああ……」

これだけの光景を目の当たりにしながら、普段と一切変わらない榎風に水豹さんは面をくらっているようだった。

が、それを理由に榎風の質問に答えない訳にもいかず、吐き気を押さえるように口許を軽く押さえながらポツポツと喋りだした。

「そんなこと、せんで良いさ……」

「んじゃ、何させようって？『アレ』が関係無いんだつたら下ろさせてもらうぞ。こんなところにいたら服に臭いがついて仕方ない」

他人が何人死のうが榎風には一切関係無いことのように、そうあしらった。

「何より、セイの精神衛生上、悪すぎる」

「大丈夫だ。お前にやってもらうのは、そんなものではない。『ソ

レ』に關与している可能性は、十分にある」

いよいよ吐き氣が堪えられなくなったのか、指が食い込むほど口を強く押さえ、水豹さんは身をくの字に曲げた。

僕としては衝撃的な光景だ。

約三年を通じて、ここまで弱っている姿は見たことない。

暴力にも恫喝にも一切屈しなかった水豹さんが、自分の目に映った光景のみで、ここまで弱ってしまうなんて、思いもしていなかった。

「とつとと答えろ、水豹。無駄に時間をとらせるな」

弱っている水豹さんに対し、一切の同情をかけずに高圧的に榎風は問いただした。

無理もない。

別に榎風は冷酷さだけをもとにこんなことを言っているんじゃない。

『アレ』が関わっていて、氣が立っている。

そして、焦っている。

『アレ』の存在が榎風を焦らせている。

「そう、難しいことじゃない」

水豹さんは一通り落ち着くと、体を起こして喋り出した。

「この、事件、手がかりだらけだが、二つ分かっていない、ことがある」

いくら落ち着いたといってもこの状況下だ。まだ喋るには辛そうだった。

「まずは犯人。この現場で一切、直接的な証拠が見つかっていない」

当然といえば当然。

犯人が分かれば事件が解決といった単純な話ではないが、事件が解決するには犯人を見つけなければいけない。

必要条件だ。

「これは複数犯の可能性を含め、警察が、人海戦術であたっている。これだけ人を、殺したんだ。どこかに、綻びがあるさ。お前らに頼みたいのは、もう一つの」

水豹さんは吐き気を堪える一拍を置き、僕らにようやくながら事件を言った。

「凶器の特定。これがやってほしい事だ」

一章：殺人日記 07

ここで僕らの関わった事件　　というにはあまりにも規模の大きすぎる出来事について、僕の知っている知識を整理しておこう。

まずこの出来事、『涼暮市連続殺戮事件』の概略。

その名前から分かる通り、涼暮市の山の中腹で起こった連続殺戮事件だ。

連続殺戮。

連続殺人ではなく、連続殺戮。

一回目の殺戮では21人。

二回目の殺戮では19人。

三回目の殺戮では38人。

合わせて被害者は78人。

三度連続した殺戮。

とても浮き世離れた出来事。

山中で起こったということから目撃者は今のところ見つからない。

若しくは、目撃者ごと一緒に殺されたか。

どちらにせよ、犯人の手がかりは今のところ皆無。

これはまだ殆ど捜査が行われていないからでもある。

これだけの大人数が殺されたのだ。そう開けっ広げに捜査を行うわけにもいかないし、犯行自体が見つかったのが昨日だから仕方ないと言えは仕方ない。

これが一つ目の謎。

二つ目が僕らの任された、凶器が何なのか。

たった78人殺すだけでも十分に狂気の沙汰だが、それだけでは飽き足らず、この犯人はある行動をとっている。

首切り。

斬首。

78人、一人残らず首を切り落としている。

被害者の秘匿が目的なのはまずない。

首を切り落とした程度で隠せるとは思わないし、78人の首を切り落とすという手間を考えれば考えにくい。

そして何より、切り取られた首はこの場に残っている。

まるでゴミでも扱うように、首が山を成して放置してある。

約80人も首。

狂気の歪なモニュメント。

それに78人も殺しておいて、秘匿も何もあつたものじゃない。推理小説に出てくる入れ替えのトリックも考えにくい。

第一、ああいったものは短時間の間だけ、孤島の中だけ、という条件のものが多い。

一步条件の外から出てしまえば、成り立たなくなる。

話が逸れたが、問題は凶器がなんなのか、だ。

前述通り、被害者は例外なく首を切り落とされている。

今のところ、死体の腐敗具合や血液から見るに、おおそ最初の殺戮から三日程度、だそうだ。

一人の首を切り落とすのに約一時間程度かかったとすると、全員で約80時間。

80時間、首を切り続けなければならぬことになる。

二人、三人と犯人を増やしていこうが大差はない。犯人の狂気には大差はない。

犯人を増やした分、隠蔽に時間がかかる。

極端な話をしてみれば、犯人を78人に増やして首を切る時間を78分の一にしたところで、露見しないように隠していたらいくら時間があっても足りない、という話だ。

そこで目が向けられたのが、魔術と言うわけか。

そして、魔術と言えはこの近辺に世界最高の魔術師がいる。

榎風のところに来るのは当然のことか。

大雑把に言つて何でも切れる『アレ』を作っているのも一つの要

因だろう。

魔術を使うにしろ、『アレ』を作り直して使うにしろ、一番可能性が高いし。

話題は変わるが、そもそも、78人も殺されておいて、何故、一回目が21人、二日目が19人、三日目が38人と言えるのかと言えば訳はちゃんとある。

いくら血の乾き具合が分かるとは言っても、この人数だ。流石に個人個人を判別することは難しい。

正規の鑑定をするにも昨晚見つけたばかりで全員をするのは無理だ。

それでも、僕らは分かった。

簡単なことだ。

犯人が教えてくれた。

それだけのこと。

何とも丁寧な事に、死んだ日付別に死体を分けていた。挑発か、それとも必然的な理由があったかは分からない。でも、僕らにはどうでもいいことだ。

「さあ、始めよるぞ、セイ」

僕の隣に立つ女性は言った。

「探偵ごっつこの時間だ」

この場に不釣り合いな晴れやかな笑顔を浮かべて。

「探偵ごっこ、ですか」

僕は思わず榎風に聞き返した。

「ああ、探偵ごっこだ」

鸚鵡返しの質問に鸚鵡返しの応答。

会話として不毛すぎる。

「考えても見ろ、セイ」

僕が意味を思い悩んでいると、榎風が補足を始めてくれた。

「今のところ分かっている情報は、鋭利な刃物、程度のことだぞ？
凶器のみだけを見つけるなんて出来ると思うか？」

言われて見れば当然のことだ。
いくら僕でも察しがつく。

「要は、私たちは『アレ』を餌に捜査の歯車に組み込まれそうにな
っていると言うことだ」

僕が察しがついたのは榎風にも分かっただろうが、わざわざ誘い
出した本人の前でそう言った。

張本人である水豹さんと言えば、僕らの後ろで現場から目をそ
らし、必死に嘔吐感に耐えていた。

声をかけても今は気を使わせるだけなので放っておくことにした。

「そう判断がつけた以上、それに参加してやる理由も義理もない」
「え？何ですか？」

思わず僕は口を挟んでしまった。

「まだ『アレ』が関わってる可能性はゼロじゃないんじゃないんですか？」

「そこで探偵ごっこ、パート1だ」

榎戸は得意気に鼻を鳴らして、腕を組み、胸を張って語りだした。

「まず第一に、『アレ』がこの世に存在する可能性が極めて低いこと」

確かに『アレ』とその持ち主はあの日以来、まったく姿が確認されていない。

《失敗作》たるあいつが言っていたように僕が消滅しなかったように、《失敗作》が消滅していない可能性だって十二分にある。

それなのに未だ見つからない《失敗作》。

麻紀さんはまだ探し続けていると大地さんが言っていたが、見つかったという報告は受けていないらしい。

だからこれは単純に確率の話。

「第二に周りに被害が無いこと」

「関係あるんですか、それ？」

「ああ、勿論。決定的にな」

榎戸は自信満々に語り始めた。

「『アレ』は元来、対大人数、対建造物を目的として作ったものだ。だから基本的にはリーチという概念がない。どれだけリーチを絞っても10メートル程度が限界だ。だから、『アレ』は一人を切るのにはかなり難儀だ。まあ、実際切る理由を持った時点で使えないからリーチを絞ることも無理に等しいことなんだがな」

自信満々なのは当然か。
作った本人だし。

「当然、同じ高さの背の人間を並べれば同時に刈り取ることは可能だが、その際確実に周囲に何らかの痕跡ができる。だが、周りを見ても」

僕は首を見回す。

三日前の殺戮の痕跡。

二日前の殺戮の痕跡。

一日前の殺戮の痕跡。

三日分の殺戮の象徴の生首の山。

そして、赤いペンキをぶちまけたように真っ赤に染まった森と地面。

その所為で判別しづらかったが、確かに森や地面には痕跡が一切見当たらなかった。

「第三に、これが決定的なやつだが」

僕が納得したのを確認して、榎風は次の説明に入った。

「切り口があまりにも無様すぎる」

榎風は視線を下にずらし、顎で死体を指す。

「私の作った『理由なき剣』がそんな無理矢理切り取ったような切り口になるものか」

榎風は再度鼻を鳴らして、腕組をほどいた。

「これで探偵ごっこパート1の終了だ」

榎風は踵を返して、死体の山に背を向ける。

この状況下で饒舌に話す榎風を、まるで化物でも見るかのようなに見る警察官たちの視線と、榎風の視線が交錯する。
確かに化物然とはしているが。

「さあ、セイ。帰るぞ」

榎風は僕の手を取り、山道に入っていく。

「おい！」

呼び止める水豹さんの声も片手でいなし、僕らはその場を後にした。

一章：殺人日記 09

僕らの家に続く長い石段を上る途中、僕は榎風にずっと疑問に思っていたことを尋ねた。

「榎風」

「どうした？」

僕の手を引きながら前を歩いていた榎風は、僕の呼び掛けに立ち止まって振り返る。

「一つ、訊いてもいいですか？」

「一つと言わずいくらでも訊いていいぞ。ただし」

榎風はベタつくような笑いを浮かべ、余った方の手を僕の白い髪の上に乗せた。

「質問の回数×十秒間のハグは譲れないな」

「……………」

相変わらず過ぎる榎風だった。

あんな光景を見た後だと言うのに。

飽きれ混じりに僕はため息を吐くと、榎風の言葉を聞かなかったことにして質問をした。

「探偵ごっこ、続くんですか？」

「おしっ！まず一個っ！」

質問したら恥ずかしげもなく僕の頭に乗せていた手でガッツポ―

ズする榎風。

本当に精神年齢が掴み難い人だった。
未だに行動が掴めない。

榎風は一頻り喜んだ後、ようやく返答を始めた。

「続けるぞ」

答えたのはそれだけ。

いつもなら頼んでもないのに、沢山喋ると言うのに。
不思議に思いながらも僕は会話を続けた。

「だからわざわざパート1なんて言ったんですか？」
「まあ、そうだな」

まただ。

別に心此处に在らずとか、返事に気が入っていないと言うわけではない。

だが、回答が素っ気なさすぎる。

「あの……榎風？訊いていいですか？」

「構わないぞ」

「もしかして、怒ってます？」

「いや、全然」

「機嫌が悪かったりは……？」

「むしろ機嫌がいいくらいだ」

「本当ですか？」

「本当だ」

「本当の本当にですか？」

「本当の本当に、だ。いくらなんでも心配しすぎだ、セイ」

榎風は笑顔でクシャクシャと僕の髪を撫でた。

手を繋いでいる以上逃げようもなく、でもされるがままなのも恥ずかしいので、顔だけを離しながら喋る。

「でも何ですか？」

「何がだ？」

「もう『アレ』が関わっていないことは分かったんですよね？」

「まあな。私の目は節穴じゃないからな」

ならば、榎風が『探偵ごっこ』などする必要などどこにもない。

『アレ』が関わっていない以上、僕らが首を突っ込むべきではないのだ。

「どうした、セイ？」

「いえ……何でもありません。『アレ』が関わっていないのに、わざわざ関わるなんてどうしたんですか？」

「んー……」

榎風は手をピタリと止め、思案するように空を仰いだ。

抜けるような青空。

雲一つ無い快晴。

『連続殺戮事件』など、そもそもなかったかのような平和さだ。

「興味本意だな」

榎風は言った。

「仮にも私は魔術師だからな。魔術師という人種は難問には興味を引かれるものさ」

他人の命などどうでもいいかのように。

榎風が建前でも、弔いのため、などと口にするとは思っていないが、ことう隠さず言うのはどうかと思う。

「まあ、下手したら『アイツ』が関わっているかもしれないからな」
「『アイツ』、ですか？」

「ああ、お前もよく知っている『アイツ』だ」

僕の知っている人間なんてたかが知れているが、それでもピンと当てはまる人が思い至らなかった。

「アレだけの人数を殺したんだ。おのずと方法も、それができる人間も限られてくる。まずはそいつから当たる」

知り合いでも容赦なく疑う榎風。

疑うと言うよりは可能性から引かずに冷静に見ているんだろうけど。

「ところでセイ。一つ質問してもいいか？」

榎風は突如、話のテンポを変えて質問してきた。

「それで質問は全部か？」

「ええ、まあ、そうですね」

「そうか……」

榎風はぐつたりと頂垂れ、目に見えて落ち込んでいた。

「まあいいか。九十秒なら上出来か」

「え？」

突然、僕は榎風に抱擁された。
きつくではなく、体全身で包み込むように優しく僕を抱きすくめる榎風。

「ちょ、榎風!？」

「九個の質問の代金だ」

それだけ短く言って、榎風は僕を抱き締める力を少し強めた。
それから喋ることなく、きっかり九十秒ハグされて漸く解放された。

白昼堂々、階段のと真ん中で。
いくら人通りが殆どないとはいえ、流石に恥ずかしかった。

「仲がいいことだな」

突如、上から声をかけられた。
真上ではなく、階段の上。
僕らの家がある場所から。

「久しぶりだな」

慌てて仰観する。

そこには黒い髪をなびかせ佇む男性、人形使い『絲状災厄』希崎時雨がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1970e/>

榎風といっしょ！あーるっ！

2010年10月10日19時36分発行